

草地更新を 積極的に

雪印種苗㈱

札幌研究農場長 三浦梧樓

飼料生産基盤の確立いまだし

国際経済競争力をもった酪農、つまり近代酪農を具現するためには

- 経営規模の拡大
- 飼料生産基盤の確立
- 労働生産性の向上

の三脚をガッチャリ組むことの必要性については酪農関係者のひとしく肯定するところであります。

ところがこの中で最も先行すべき筈の飼料生産基盤の確立に目を向けてみると意外に遅れているのはなんとも残念なことです。というのは飼料生産の大宗である牧草の収量をみると、昭和48年の農林統計の示すところでは

全國 10a 平均 3.62t

北海道 ツ 3.19t

でこれも僅々4~5年前から漸く3.0tラインに到達したというのが実態です。

国の策定した第二次酪農近代化計画基本指標(46~52年目標)による飼料生産(養分を生草換算)では、

◦ 土地条件の制限の少ない地域 5.0t以上

◦ 土地条件の制限の多い地域 6.7tツ

◦ 他作物との複合形態の地域 8.3tツ

を指標としており、牧草の平均収量だけからみますと、半分以下という貧弱さで、これでは飼料面だけからみても、決して厳しい国際経済競争に対応出来ないでしょう。

いま1つここで考えたいことは現実の牧草3tどりが日本草地の実力で、国の指標収量が単なるデスクプランであるのかということですが、私は國の指標が決して不可能な収量目標ではないと信じています。

それは10数年来各地で行なわれている草地共進会(草地共進会は単なるコンクールではなく、経営、経済ベースを考慮して行なわれている)の実績をみても府県では15~20t、北海道でも8~10tどりの例が各地に見られるからです。

さらにまた従来立地条件が不良で農牧不適地視? されていた未利用地での大・中規模の草地造成で、悠々5.0t以上の牧草生産を挙げていることからしても、収量増加の可能性は大きいとみています。しかばこのような中にあって何故こんなにも平均収量が低いのか、諸種の原因を考えられますが、特に注目したいのは老朽化草地を大きく抱えていることあります。

草地は経年と共に荒廃化して行くもの

草地は造成、維持管理、利用に万全を期しても経年と共に荒廃化(収量低下)を來すもので、特に日本の従来草地のように造成当初から多収を担った。採草(刈取)型草種、品種を重用した場合は2~3年をピークとして加速度的に荒廃低収を示すのが一般的傾向です。

目

- 春を迎える北国の酪農 中野 富雄……表紙②
- 草地更新を積極的に 三浦 梧樓…… 1
- 自給飼料の生産計画をたてよう 兼子 達夫…… 3
- 暖地型牧草グリーンパニックの サイレージ利用 最上 誠二…… 4
- 重要な栄養源である枝豆の品種と 栽培上の問題点 中原 忠夫…… 7
- 自給飼料増産推進モデル飼料畑耕作検討会—その 1——11



早春の牧場風景

半永久的な特性をもった牧草を栽培しながら何故経年とともに荒廃（低収）化するか、それには次の三つの要因が関係しているといわれています。

(1) 不良気象条件 (2) 不良土壤 (3) 不良な管理

一般に牧草地の生産力は古いものより、新しい方が大きく、経過年数の古くなるのにしたがって減退します。この理由については判然としない点もありますが、大体次の原因によると考えられます。

- (イ) より生産性の大きい草種は次第に駆逐され、より生産性の低い草種によって置換えられる。
- (ア) 土中における酸素の欠乏
- (ハ) 土中における過剰な二酸化炭素
- (乙) 有毒性物質の分泌
- (ホ) 窒素飢餓（硝酸化能力の減退）
- (ヘ) 好ましくない土壤 pH と充分な有効磷酸及び加理の欠乏
- (ト) 土壤表面緊密度の増加
- (チ) 未分解および一部分解した有機物質の蓄積（マット生成）

等々によるものといわれ、その原因は広範多岐に亘っています。そしてこの荒廃を防止改良するためには、①安価で持続性ある肥料の施用、②優良草種の導入、③大農具利用による更新などが考えられますが、果してこれが励行されているか、否かを考えてみると最近の傾向としては兎角拡大に目を奪われて（補助、融資の道が開けていることにもよる）脚下の既成草地の更新まで手が届かない感を強くするものです。成程草地の拡大は勿論必要ですが、拡大草地は概して酪農拠点（牛舎）から遠距離になります。酪農は別に運搬農業であるとも言われており、飼料、生産物の牛乳、さらには副産物の排糞尿など成牛 1 頭当約 50 t 前後の大量のものの運搬があり、飼料だけでも生草換算で 30~35 t にも及ぶことを考えますと、先ず近距離に飼料基盤をもつべきであるのは労力面の合理性からみても当然であります。

また新規の草地造成には多額の経費を必要とします。日本酪農の規模拡大を論ずる場合、無条件に賛成の出来ない理由の一つとして地価の高い

（欧米に較べて数十倍から数百倍ともいわれている）ことを指摘される向きもありますが、この地価は別にして、最近の造成経費をみても補助、融資の制度はありますが、10 a 当 3 万円以上で、年々増嵩傾向にあります。ところが更新は新規造成に較べて障害物除去、刈払い火入測量調査などは不要で、土改資材もまず半量程度で済み半分以下の経費で完全更新が実施出来ます。

草地更新で酪農経営の内面充実を

最近「集約草地」という言葉をあまり耳にしませんが、これは一つには新規の草地造成が国の農業施策の重点項目となって、たとえば畜産局関係の草地造成、農地局の行なう農地開発下の草地造成、さらには農政局の構造改善事業（水田転換の牧草栽培を含めて）と競っての感のする程、草地造成が積極的に行なわれており、まことに喜ばしいことではありますが、この華やかさの陰に泡沫化したかのように集約草地の名がきかれなくなりました。

しかし現今日本の日本型酪農の本質、特に搾乳牛という立場からみると拠点周辺の草地、庭先集約草地こそ重要な存在で、これが基盤となってこそ酪農経営の内面充実が期待できるのではないかでしょうか。

古くから利用されていた牛舎に近い既成の草地、即ち庭先草地を一日も早く更新して集約多収草地にすることを積極的に考えたい。

そして育成牛、肉牛部門は所謂外延拡大の新規造成草地に依存すべきであります。

新規の造成草地には大幅な補助、助成さらには融資の道まで開けていますが、草地更新には競馬益金の補助、数年前から行なわれてきた草地整備（排こん線の整備等）事業の補助程度のようですが、草地更新についても、もっともっと手厚い公共的措置が講ぜられ、受益者の積極的意欲と相俟って身近な処へ多収草地を持ちたいものであります。

脚下の老朽化草地を積極的に更新し、これに新規の草地造成を併行せしめることによってこそ内面充実と拡大が期待できると思うのは我田引水であります。